

春鳥畫談

汀 鷗

森羅萬象皆我師なり

繪を以て一家を成さうといふ人は、たゞ毎日繪を畫いて勉強してゐたからとて、必ずしも上手になれるものではない、日常目に觸るゝもの、耳に聞えるもの。森羅萬象皆我が師であるから、自らを卑くして、それ等の物より教を受けねばならぬ。

淨瑠璃にきけ

曾て某席亭に義太夫を聴いた、初めに出る語り人は、其外題を見て筋を想像するばかり、何を言ふてゐるのか少しも分らぬ、敵も味方も混亂して、徒らに騒がしいのみで要領を得ぬ。それが上手な真打になると、男女老幼の言葉の使ひ分け、貴賤上下の身分の表現も、各々個性がよく現はれて實に其人を見るが如く、地の文句を語りては、其場の景致が目につぶが如く、景も人も活躍して、身は其境に在るの思

がする。

繪もこんなものではあるまいか、筆の動かぬうちは、物と物との關係が正しく明らかにゆかずに、溷濁し亂雜を極め、其畫題の松島とあるので、あの岩らしいものゝ上にある木は松かと想像するに過ぎない、辛ふじて類性は出ても、個性は現はれぬが、

デッサンの確かな人の繪にはタトエ曖昧らしい畫き方をしてあつても、畫面にある物の特質がよく現はれてゐて、觀者に無用な疑惑を起させない。

人形芝居を見よ

人形芝居を見る、下手な人形使は、人形が動かずに自分の身體ばかり動く、人形がお辭儀をすれば自分もお辭儀をしてゐる、他で見てゐると、人形使ひでなくて人形使はれの感がある。こ

れが一流の使ひ手になると、泰然自若、自分はやゝ反身になつて身動きもしないが、手にせる人形は盛んに動く。

繪もこれと同じやうである、初心のうちは筆先ばかりチヨコ／＼動いて、心は少しも働いてゐない、上手になるに従つて、



吉田ふじを筆物靜

筆致は粗くとも意味は緻密になる。

能樂によつて悟れ

能樂もまた吾人に教を惜まぬ。一本の扇子、それはさゝ事の際に、瓶子ともなり盃ともなる。疊んで手を添えて傾ければ、それは酒をつぐといふ意味になる。開いて受け、これを口にして仰げば、酒を飲んだことになる。そこに實際の瓶子盃などなくとも、充分觀者をして會得せしむるに足りる。

繪もこれではよいのではあるまいか、寫實必ずしも上乘の繪ではない、タトへ其物を明らかに現はさぬとも、それらしく思はして、少しも不自然の思ひを觀者に與へなければよいので、語り、綜合上の美が、些細なる點の、不自然や欠點を掩ふて仕舞へばよいのであらう。

各その長を採れ

我等は義太夫を聽いて、個性の研究の忽せにしてはならぬことを學び、人形使ひを見て、筆先の技術の無用なることを知り、能樂によつて、感情さへ現はれたなら、物の細微な描寫の不必要なことを悟つた。併し、寫實に重きを置過ぎるなら、恐らく義太夫其もののやうに、餘韻なきものとならう。堂々と態度のみ立派でも、微細な觀察が欠けてゐたら、無意味なものにならう。感情さへ現はせばと、あまりに大タイに過ぎては、不得要領のものにならう。能の場合に於ても、盃とか瓶子とか、重要ならざるものであればこそ、扇子で濟みもすれ、主要な人物は、やはりそれ相應の面も用ひ、衣裳も着けてゐるのである。



△一代に秀た畫家は、青年畫家に、己れの得た經驗を傳へることを吝んではならん、時によつては、己の作も貸與へて摸寫をさせる位の事も、してやらねばならん。出來得る文學生の誤謬を正し、可成上達する様に導くのは、先達の義務である。技藝が繼續させる丈の價值のあるものたる以上は、我々が、我々の先進者から得た經驗を、後進に傳へねばならん。

△若い畫かき連が、よく自分の許へ製作を持つて來るが、自分は、義務と思つて、いつも製作を見てやり、又た借りたいと云ふ畫、刷物などある場合には、努めて貸てやる。又た批評と勸告は、正直思ふ通りを云つてやるが、之は時によつては、決して愉快な話でない、時には胸の悪くなる様な惡作を持つて來る。

一體畫かきにとつては、惡作を見ると云ふ事は甚だ危險な事であつて、自分も惡作を見てはならぬと云ふ事は、能く承知してゐる、又た實際其惡處が身に傳染うつる様な心持がして、實に劍呑へ置いて、してやらねばならん。之は我々の義務であるし、又た世間もこれしきの事は、我々のすべき義務と思ふて居る。

我々は我々が先人から受けたと同様、矢張彼等にもせねばならん。(岩村氏譯、ノースコート畫談の一節)

*

*

*

*

*

*